

英国小説と翻訳・翻案

関連するSDGsの国際目標



人間文化学部 国際コミュニケーション学科

准教授

山本 薫

研究分野：英国小説、ヨーロッパ現代思想、翻訳、翻案

概要：これまでは英文学とヨーロッパの現代思想を分野横断的に研究してきた。最近は英国小説の翻訳に取り組みつつ、翻訳や翻案の理論を英国小説の研究に取り入れて研究している。

■『評伝ジョウゼフ・コンラッド/女性・アメリカ・フランス』

(松柏社, 2024) (著者) ロバート・ハンプソン (訳) 山本薫

世界のコンラッド研究の第一人者ロバート・ハンプソンによる新しい伝記の本邦初訳。英国商船隊の船員時代の体験をもとに海の上の男性だけの世界を描く作家として読まれてきたコンラッドの知られざる側面に焦点を当てた新しい伝記の本邦初訳です。



没後百年
いまますます高まるこの作家の、これまで見過ごされてきた著作も多くの作品をじっくり読み込みながら、作家の人生や時代背景もあややかに浮かび上がらせる。それがたった256ページで成し遂げられていることに驚嘆させられる。評価はみなこうであっていいと望める、鑑のような一冊。
—— 柴田元幸

■コンラッド没後100周年記念論集 (1)

Joseph Conrad's Cultural Legacy: Centennial Essays

(Bloomsbury, 2024) Linda Dryden, Robert Hampson (編)

(担当第2部第10章 'Trial of the Foreign: Translating Conrad into Japanese')

日本におけるコンラッド作品翻訳の歴史をたどり、今や世界文学の傑作とも言われるコンラッドの『ノストロモ』(Nostramo 1904)を日本語に翻訳する上での「試練」(trial)について論じた。

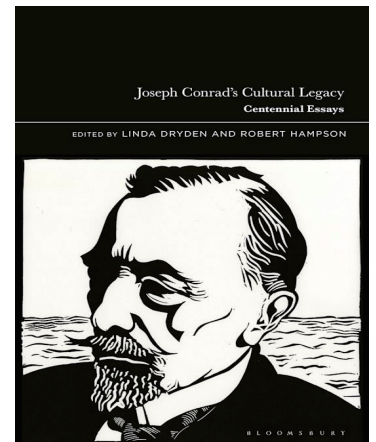
■コンラッド没後100周年記念論集 (2)

The Resonance of Joseph Conrad in Contemporary Culture

(Berghahn Books, 2025) Agnieszka Adamowicz-Pośpiech (編)

(担当第2章 'Conrad's Echo in Anne Carson's *Nay Rather*: The Task of the Artist as Translator')

ノーベル文学賞候補の一人と目されるカナダの詩人・作家・翻訳家・研究者アン・カーソン(1950-)の翻訳論を頼りに、カーソンの詩「ジョゼフ・コンラッドとのタベ」を分析し、母語ではない英語で著作したコンラッドにおける翻訳行為の意味を考察した。



■コンラッド没後100周年記念論集 (3)

'Courageous Recognition of All the Irreconcilable Antagonisms':

Sōseki's *The Miner* and the Specter of Conrad'

FICCTIONS: Studi sulla narrativa(2024), pp. 27-42.

夏目漱石の中編小説『坑夫』(1908)とコンラッドの小説の影響関係を論じた。

■その他

現在は、小説と漫画などの他の媒体を組み合わせて研究しています。

英国小説の(英語から日本語への)翻訳は継続しつつ、英国小説とそれを漫画に翻案した作品を比較し、言葉から絵に表現媒体が変わるとどのようにテーマや効果が変わるのか、といったことなどを考察しています。

